

バシュラールの世界

— 文学と哲学のあいだ —

松岡達也 著

名古屋大学出版会



バシュラールの世界

—文学と哲学のあいだ—

松岡達也 著



松岡 達也 (まつおか たつや)

1924年 東京に生まれる。

1948年 東京大学文学部仏文科卒業。

現 在 名古屋大学教授。

主 著

『自然主義・リアリズム』(三一書房)

『ルナール博物誌』(練金社)

『文学との対話』(審美社)ほか

パシユラルの世界——文学と哲学のあいだ

昭和五十九年十二月二十日第一刷発行

定価三五〇〇円

著 者 松 岡 達 也

発行者 井 関 弘 太 郎

発行所 名古屋大学出版会

〒四六四 名古屋市千種区不老町一

名古屋大学構内

電話 名古屋(〇五二)七八一―五〇二七

振替 名古屋 二―一六三八

©松岡達也 一九八四年 検印廃止

印刷・製本 名鉄局印刷(株)

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-930689-24-4

ガストン・バシュラール（一八八四—一九六二）はフランス現代文学の領域で第一級の批評家に数えられているが、彼自身はむしろ、想像力の哲学者と呼ばれるほうを好んだ。このバシュラールの、批評方法を明確にするため、バシュラールの方法の特徴を概観したあとで、バシュラールを軸としてバシュラールとサルトル（一九〇五—一九八〇）、バシュラールとメルロー・ポンティ（一九〇八—一九六二）の比較を試みてみた。

三人は現象学と精神分析という、二〇世紀前半の二つの大きな思潮のなかで活躍した哲学者であるが、周知のように、サルトルは、実存主義からマルクス主義に移り、バシュラールは精神分析から現象学へ、メルロー・ポンティは現象学から新しい存在論の方向に向かっていった。しかし、三人が共通して問題にしたことは、つきつめていえば、やはりユギト（我惟う）の問題、主観の問題である。彼らは、意識と対象、自己と他者、意識と無意識、自己と身体、主体と状況の問題などを、いわば内側からとりくんだといつてよい。

彼らのあとをうけて、フランスでは六〇年代になって、構造主義の運動が盛んになってくるが、若い構造主義者たちは、彼ら先輩のこうした、実存的な、主観の側からの問題のアプローチの仕方に異議を唱え、彼らをフランスのユマニスムの最後の哲学者だと呼んだりしている。構造主義は、言語や制度や構造など、個人の外側にあるものに力点を置き、個性とか創意とか自由といった、これまで人間性といわれてきたものの優越的な価値を疑問視したからである。こうした状況のなかで、フランスでは「哲学の死」が叫ばれたりもしている。

しかし、人間科学がいかに発達し、文化の多元性がいかに唱えられても、ヨーロッパが発見した「主観性」の問題は、型がかわっても、人間の問題としていつまでも残るだろう。人間にとっでは、現実を認識することと、自己を了解することとは不可分に結びついているからである。

こうしたことを念頭において、わたしは三人の哲学を考えてみた。

ここでは、とくにサルトルの初期の考え方が批判の対象になっているが、サルトルが示した、平和に対する道徳的勇氣について問題にしているわけではない。

三人の哲学者は、第二次大戦から六〇年にかけて、大体同じ時期に活躍した。三人のなかではもちろん、サルトルが一番有名である。サルトルは第二次大戦後、実存主義の旗手として華々しくデビューし、多くの小説や戯曲や評論によって、また『レ・タン・モデルヌ』誌を創刊、主宰して鋭利な時事論文や政治批判などによって、戦後の思想界を指導した世界的な文学者、哲学者

として知られている。彼はまた、自由の擁護と反戦平和の運動の実践的な活動を通じて、大衆運動のリーダーの一人でもあった。一九八〇年の春サルトルが没した時には、数万人のバリ市民がペール・ラ・シェーズに運ばれる彼の遺体のあとにつきそい、その死を惜しんだのである。

三人のなかでは、バシュラールが一世代ほど、他の二人より年長である。しかし活躍した時期は他の二人と大体重なっている。一九四〇年にソルボンヌ大学に科学史の教授として迎えられ、六二年の死に至るまで、教壇に立ち、科学史や詩の講義を続けている。ソルボンヌの大きな階段教室での彼の講義には、その語り口の面白さから、聴講者があふれ、大盛況であったといわれている。詩的イメージと想像力に関する多くの著作を残しているこのバシュラールについて、ロン・バルトは『エッセ・クリチック』（一九六四年刊）のなかで「バシュラールは批評の真の一派を開いたが、その豊かさは、今日のフランスの批評がこの上なく開花したかたちで、バシュラールの影響の下にあるといえるほどである」と書き、バシュラールの文学批評の上での先駆的価値を述べている。

最後に、メルロー・ポンティだが、彼はエコール・ノルマル以来、サルトルの年下の友人で、学位取得後、リヨン大学を経て、一九五二年に若くして、有名なコレージュ・ド・フランスの教授となった。心理学などの講義のかたわら、大学人として『レ・タン・モデルヌ』の成立にも協力して、ジャーナリズムでも活躍したので、実存主義の盛期には、彼は「よそゆきのサルトル」と

いわれたりした。政治論文を集めたものには『弁証法の冒険』などがあり、文学や哲学や絵画や言語などについての評論は『シーニュ』などにおさめられている。『見えるものと見えないもの』の執筆中に急逝した。死後にこの『見えるものと見えないもの』や『世界の散文』などが刊行されている。今日では、知識界でのメルロ＝ポンティの評価はサルトルより高いようである。たとえば、ベルナル・シシェールはその『メルロ＝ポンティ論』（一九八二年刊）のなかで、メルロ＝ポンティがはじめて、哲学のなかにスタイルをもちこんだ、と語り、彼によって、哲学が普遍的知識の伝達ではなく、文学や芸術と同じように一つの創造に、「意味形成の作業」(travail de la signification)に、いいかえれば、「シーニュに向かう、限らない作業、言語に基づく言語の作業、自己の言語のなかにおける主体の作業」に変わった、といって、彼の哲学の今日的意味を評価している。

ここに集めた論文は、もちろん、この三人の哲学者の思想の全貌を語ったものではない。バシユラルの思想については、ほぼ全体にわたってふれているが、サルトルは、第三章の「バシユラルとサルトル」で、バシユラルの人物想像力Vの考えをより明らかにするためにとりあげた。ここでは主として『存在と無』に書かれているサルトルの思想が扱われている。第四章の「バシユラルとメルロ＝ポンティ」では、バシユラルの人物想像力Vと言語観Vと存在論V

を語るために、メルロ＝ポンティの知覚論や言語論や存在論をとりあげた。主として『知覚の現象学』、『シーニュ』、『目と精神』、『世界の散文』と『見えるものと見えないもの』に書かれている、メルロ＝ポンティの意見を念頭においている。

次に各章の主旨を述べておこう。

第一章の「バシュラルの読み方」はバシュラルの思想の軌跡を三つの段階に分けて語ったものである。

バシュラルを現代批評の先駆的役割を果たした哲学者の一人として考える場合、バシュラルの批評方法を一括して△バシュラルの方法▽と考えるのは適當ではない。なぜなら、彼の三〇年にわたる批評活動のなかで、彼はかなり自分の△方法▽をかえており、この間に考え方にも相違ないがみられるからである。

「バシュラルの読み方」のなかで、わたしはこの発展を次の三つの段階にわけて考えた。

第一の時期は大体三〇年代で、彼が主として△形相因▽に力点をあてて考えていた時期である。この時期のバシュラルの考え方は、たとえば、『持続の弁証法』のなかで提案した△三乗のユギト▽ (cogito)³ の主張によくあらわれている。一乗のユギト (cogito)¹ はまだ作用因の次元にあり、物と同じように、身体の状況での反射や反応であって、自然の因果性に支配されている、と彼はいう。二乗のユギト (cogito)² は目的因の次元であるが、この次元でも精神はま

だ目的にとらわれている。三乗のユギト (Cogito) になってはじめて、精神は質料因と目的因を支配して自由になる。この次元で人格は形相因となり、美的自由を享受できるというわけである。そしてこの時期のバシュラルにとっては、ヴァレリの詩がもつとも完成度の高い詩と考えられている。なぜなら、精神の自由な戯れ、躊躇や弁証法のこまやかなニュアンスがヴァレリの詩にはよく表現されているからである。

第二の時期は大体四〇年代にあたり、四元素（火と水と空と大地）に基づく、いわゆる質料が、自然の質料としてあるばかりでなく、詩の質料にもなっていることに着目して、詩のなかからこれを取りだそうと考えていた時期である。同時にこの時期には、バシュラルはもっぱらフロイトやユングなどの精神分析によりかかり、コンプレックスやリビドーや祖型を念頭において、詩や詩人を考えてゆこうとした。しかし、彼は詩人個人の生活の精神分析をやったわけではなく、詩の次元、表現の次元にあらわれている四元素を見きわめようとしたわけである。四元素が表現の次元で、どのような象徴となつてあらわれているか。いいかえれば多くの詩にはその質料として、四元素の一つあるいは二つがあり、その質料が詩句のなかで、どのように加工されているか。（たとえば、ポーの場合には、水は彼のある詩の質料であるが、彼は水から、暗さや沈黙や死などを読みとっている。）表現の次元で、この質料がどういう型のコンプレックスやオペレーションの代理や象徴として働いているか。こうした点を考えた時期である。そして、この時期

の彼のこうした方法が、新しい△解釈批評▽に一番よく影響をあたえているように思われる。

第三の時期は、現象学に立つて、△イメージの出発点▽を、今度は無意識にではなく、意識に、とくに△夢想意識▽において、詩的イメージのもつ△詩的意味作用▽を考えている、五〇年代の時期である。この時期の著作としては『空間の詩学』と『夢想の詩学』がある。この時期には彼は、詩の「解釈」から離れ、何ものの昇華でもない、△純粹昇華▽(sublimation pure)の詩がもっている△詩的意味作用▽をとりだすために、△素朴な心▽が主張されている。ゆたかな直観力の助けをかりて、詩があたえてくれる△夢想の幸福▽について語り、詩が読者の意識にあたえる△反響▽(retentissement)の度合が詩の価値を決定する、と述べている。

第二章の「バシュラルの現象学」は、この第三の時期のバシュラルをとりあげたもので、バシュラルの現象学が、同じ「現象学」でありながら、フッサールの現象学の厳密性とはかなり違った面を示していること、むしろミンコフスキー自身が述べているように、バシュラルの現象学はミンコフスキー的現象学であって、「事象に帰れ」の有名なテーゼがバシュラルの場合には、△イメージの出発点▽に身を置くことにかえられ、「志向性」が△魂の志向性▽として捉えられていることを明らかにしようとした。

いいかえればバシュラルの現象学の特徴は、詩の創造において働いている想像力すなわち、△非現実に応ずる機能▽を説明することに重点があるわけであるが、こうした、詩の理解に向け

られた、バシュラールの現象学的アプローチの諸特徴と、ミンコフスキーの現象学との近似を述べたものが、この論文である。

第三章の「バシュラールとサルトル」はバシュラールとサルトルの相互批判を扱ったものである。

相互批判とは、サルトルが『存在と無』のなかで行っているバシュラール批判とバシュラールが『大地と休息の夢想』『大地と意志の夢想』の二著で行っているサルトル批判のことであるが、これをとりあげて、その評価を試みた。

この批判を読みくらべてみると、サルトルもバシュラールも、パート（ねり物）を介して、物と人間との関係を捉えているのだが、サルトルの立場がどちらかというと物に対して傍観者の立場で、バシュラールのほうがむしろ、物に働きかけることによって作りあげられる、物のイメージを問題にしていることがわかる。サルトルはバシュラールと違って、△手の喜び▽を知らない。そこから、時事問題に強い関心をよせるサルトルがかえって、現実からの逃亡を願い、孤独の夢想家のバシュラールが働く者の喜びを語るという奇妙な事態を見ることになる。

その理由は、サルトルの主張がつきつめると還元理論であり、彼の場合には、身体（手）を通じて、物と人間の相互交流から生まれる、自然の欲求やイメージが無視されているからである。パートにしる、根にしる、サルトルにとっては、それらは現実の混沌を示すだけで、主体の参加

を拒絶する。したがって、彼が作りあげるイメージは静的で、分断されたイメージになっている。それに較べて、バシュラルの $\wedge$ 物質想像力 $\vee$ は、働くことのなかにある人間と物との相互のダイナミズムを主張している。こうした点で二人は対称的である。

第四章の「バシュラルとメルロ・ポンティ」はバシュラルとメルロ・ポンティの比較である。サルトルとバシュラルとメルロ・ポンティの三人を並べてみると、サルトルだけがひどく知的で、かえって貧弱にみえる。あとの二人の現実理解には、ゆたかさと深さがあるように感ぜられる。バシュラルの $\wedge$ 想像力 $\vee$ とメルロ・ポンティの $\wedge$ 知覚 $\vee$ についての意見をさぐってゆくと、両者が $\wedge$ 想像力 $\vee$ と $\wedge$ 知覚 $\vee$ を駆使して、ともに $\wedge$ 原初的な現実 $\vee$ にせまっについて、かなり近似があることがとりだせる。言語観でも両者は近い。

しかし二人が存在しないしは実存の姿として語っている、円のイメージと垂直のイメージの場合はどうであろうか。バシュラルは $\wedge$ 存在はまるい $\vee$ といい、メルロ・ポンティは $\wedge$ 実存は立っている $\vee$ と書いている。この円と垂直という二つのイメージの根底にあるものをさぐろうとするのがこの論文全体のねらいである。

この章の第一節では、バシュラルが精神の頂上に位置すると考えた $\wedge$ 想像力 $\vee$ と、メルロ・ポンティがもっとも解明に力をそそいだ $\wedge$ 知覚 $\vee$ とがどういうものかを考えてみた。それぞれの見解を紹介して、想像力と知覚とがサルトルの考えのような排他的関係にはなく、一方が想像力

といい、他方が知覚といっているものが、ほとんど同じ働きをさせていることを説明した。

第二節では両者の言語観をとりあげた。

バシュラールは文学の機能は、同じ語を用いながら「ほかのことを意味させ、違った風に夢想させることである」と書いている。一方メルロー・ポンティは、表現とは「既成の意味作用にへ首尾一貫した変形V、歪曲、移調を加えることだ」と述べ、スタイルの重要性を語っている。文学表現についての二人のこの定義は、二人の意見が一致していることをよく示している。表現の裏がわにある「沈黙」についても、同じことがひきだせる。たとえばバシュラールは、リルケの詩を引用して、沈黙が詩の根元にはあるといい、メルロー・ポンティは、マチスの創作過程を映したフィルムについて論じながら、文学においても、語と語の間にあるもの、語と語の間の側面的な意味に思いをよせることの必要性を強調している。このように、二人の詩や文学の表現についての意見をならべてみると似ているところが多い。なぜなら、両者がへ生まれつつある意味Vをそれぞれの角度から——一方は想像力の角度から他方はゲシュタルトの見地に立つて——とりあげているからである。さらにいえば両者のなかに、「私が語っているのだろうか、世界が語っているのだろうか」という同じ問いを見ることもできる。

第三節は両者の存在論をとりあげた。同じように、この場合も、二人はそろって、主・客の決定的な対立に立ったへ古典的存在論Vを否定している。一方は自己的存在論をへ微分的存在論V

などと呼び、他方は自分の存在論を $\wedge$ 内側からの存在論 $\vee$ と呼んでいる。

しかし、この点では二人のあいだにかなりの違いが見出される。パシュラールは存在を内部と外部の幾何学でとらえることは無理で、存在はいわば $\wedge$ うず巻 $\vee$ であり、「存在は、爆発しながら放散するところの集中であり、同時に、中心に逆流するところの放散でもある」と語っている。そしてとくに夢想の状況において彼は存在の問題を考えようとしている。夢想においては、主・客は敵対の関係にはならず、むしろその関係は $\wedge$ 我れ $\vee$ と $\wedge$ 我れのものとしての非我 $\vee$ の関係にかわり、そこには幸福な充実の状況があることを彼は語っている。

これに較べて、メルロ＝ポンティは感覚の次元、身体の次元に存在論を据えている。そして、見えるものが見るものになるという逆説、見えるものの自己到来——反省能——にもっぱら目を向けて、新しい存在論をうちだしている。

パシュラールもメルロ＝ポンティも、判断や分析以前の状況、いわば原初的な次元で（一方は夢想の次元で、他方は感覚の次元で）存在の姿を統合的に、一挙に、トータルに把握しようと企てるわけであるが、このとき、存在の姿として浮かび出るのが、一方は円のイメージ—— $\wedge$ 存在はまるい $\vee$ ——であり、他方は垂直のイメージ—— $\wedge$ 実在は立っている $\vee$ ——である。しかし、パシュラールのアプローチはかなり直観的で、価値観的でもある。それに較べてメルロ＝ポンティの $\wedge$ 実存の垂直性 $\vee$ の主張は、理知的というか、説得的であるといつてよい。直観的、理知的

といった区別は、どちらが正しく、どちらが間違っている、という意味では無論ない。

こうした問題を取りあげたのが第四章である。

哲学は多分、理詰めの作業であるが、どの哲学者も、理屈をこえた、おおもとのところで、現実に対する、ある独自のイメージをもっているに違いない。哲学と文学との境界があいまいになっ
てきている現在である。そう考えて、これら三人の哲学者にアプローチしてみたが、とりあげ
方が、やや文学的にすぎているかもしれない。

目次

まえがき

第一章 バシユラールの読み方……………1

第二章 バシユラールの現象学……………49

——詩のよりよき理解のために——

第三章 バシユラールとサルトル……………119

——幸福な手と汚いパート——

第四章 バシユラールとメルロー・ポンティ……………201

——円と垂直——

あとがき……………383

第一章 バシユラールの読み方